

体験学習旅行が学生に持つ意味の実証的研究

石 原 静 子*
伊 藤 武 彦**

人間発達学科のプロゼミ(1年生ゼミ)の一つで、受講者ら19名の学生を対象に、韓国体験学習旅行を行なった。旅の前後アンケートと直後の感想文をデータとして、効果の測定を試み、体験学習が学生に持つ意味を検討した。元従軍慰安婦や韓国大学生等との人的交流が特に強い感銘を生じ、事前学習の有効性が認められた。学生の体験の受けとめ方にはいくつかのタイプが見分けられ、平和関心度とある程度の関連があった。

1. 問 題

大学教育における体験学習の意義

大学に求められる現実との回路

第二次大戦後の学制改革が大学に及んでから、まもなく50年になる。複線の細い頂点に立つエリート独占の場から、万人の入れる高等教育機関へと変わったのだが、大学のしくみや営みがそれにふさわしい変革をとげたとは言えない。依然として教員の持つ専門知識の一方的伝達が中心であり、研究・教育活動のほとんどはキャンパスから出ない。機器の発達等で授業の景観は多少現代化し多彩になっても、閉じた抽象的知の伝達・訓練という基本線は変わらない。大学の営みの内容といえる諸学はもともと、現実の中で生ずる疑問を解明し問題を解決することから発しているのに、体系化が進むにつれ母体である現実を遠ざかっていく。今や同年齢層の約半数に達する進学者たちが、社会の諸層から出てやがてそこに戻ることを考えても、大学教育のこの抽象性は克服ないし補われる必要がある。学問自体にとっても、限らない細分化・抽象化の一方で現実に戻り立つ努力が、活力ある

発展のためには必須であろう。

大学に限らず学校教育はもともと、子どもを現実の生活・労働や地域から引き離して、文字や数を教え、抽象的な知の世界に導く制度である。そのためこの国でも義務教育制度の初期は民衆に理解されないが、やがてこの抽象知を身につけることが立身つまり生活向上の近道と分かると、進学熱が広まる。日本の初等中等段階でも戦後まもなくから、教育を子供の生活現実に戻して再出発する試みがなされたが⁽¹⁾受験体制に伴う抽象知の記憶競争に押し返されて、現在に至っている。受験を乗り越えた大学で改めて、閉ざされていた現実との回路を取り戻すことができる、すべきだ、とはいえないだろうか。学生たちにしてみれば、間もなく社会現実の中に身を置くことになる、直前の機会である。彼らは閉塞が長かった分、広い世界を見聞し活動したい欲望を漠然とでも持っており、感受性や活力もそれにふさわしい年齢にある。相対的にだが家庭や社会の束縛から多少自由な、その意味で貴重な期間でもある。

和光大学におけるとりくみ

和光大学は1966年、第一次ベビーブーム

*いしはら しづこ 本学部教授

**いとう たけひこ 本学部助教授

っ子の大量進学期にあたって、大衆化した新しい大学のあり方を模索し試行することを掲げて、スタートした。初代梅根学長の進歩的教育史観に基づき、また母体である和光学園が戦後初等中等段階の新教育実験校であった実績をもふまえてのことである。この理念を具体化する「教育方針」には、従来の大学教育の抽象性・閉鎖性を克服する方途が、あれこれ盛られている。一般教育重視を述べた項目の一つに、諸学の入門や概論でなくその学問が現実の課題と切り結ぶ姿を中心とすべきだとあるし、1年生に初步の研究体験をさせるプロゼミでは、学外に出て諸施設・諸展示を見学したり調査活動をしたりすることが勧められている。「学問的あるいは科学的方法によって事実を分析し、問題を解決するという創造的な思考活動は、学者だけでなく、広範な実務の諸分野において必要なものであり、大学に学ぶほどの者はまず以てそのような研究意欲と研究能力を身につけるべきである」と梅根は書いている。⁽²⁾

こうした理念と方針のもとに和光大学の授業には、諸学を講ずると共に現実との関わりを重視し、できるだけ学生に実体験をさせる例が、比較的多いといえよう。プロゼミではもちろんのこと、例えば一般教育のある科目で、現代日本の産業構造や問題点の深い理解をめざして、学生を地方の農園に連れていき農業体験をさせたケースがある。⁽³⁾さらに国外への体験学習旅行が、カリキュラム内と外の両面で、いくつも実施されてきた。中国対象のそれはほぼ毎年、1995年度で第8回を数えているし、芸術学科ではローマに小さな拠点を作ってやはり毎年、かなり自由なスケジュールで学生たちを、美術の実物だけでなく異文化・異生活に触れさせる旅をしている。⁽⁴⁾

体験学習の客観的評価の必要性

先に述べたような日本の教育状況からいって、こうした学外、国内外へと体験世界を広げていく試みは、学生たちに見るべき効果を生じ、教室内では得られない意義を持つと思われる。珍しい見聞をして視野が広がるだけでなく、文字

や映像を通してとは違う生の現実に直面して、問題の所在に気づく。解決を求めて、いま何ができるかを考え、自分を含めた人類の未来といった事柄にまで、問題意識が広がるかもしれない。もちろん参加者全員がそうなるわけではなく、見聞や体験の受けとめ方は、一人一人の経験や資質等々を反映して、多様にちがいない。残念なのは、そうした事実を客観的に捉える努力が、上に述べてきた諸種の体験学習試行に伴っているとは、必ずしもいえないことである。感想文集が、それも全員でなかったりかなり遅れた時点で編まれたり、などが通例のようである。旅の企画者である教員が、自分の思いこみを基礎に、旅の途中や以後に参加者の一部が偶然洩らした感想や言動を任意に加えて、「効果あり」と判定し文章にもする、あたりが一般的といえるのではないだろうか。

戦後の大学で抽象知の伝授に偏ることの限界を自覚してだろう、体験学習の試みは、和光だけでなくあちこちの大学で実施されるようになった。中には東南アジアの奥地に直行してホームステイし労働もする、といった意欲的な実践もあるが、⁽⁵⁾効果のほどは、学生たちが「人が変わったようになる」といった観察記述の域を出ていない。次の段階として必要なのは、こうした旧来の大学の枠を破る試みが学生たちに何を生じるのか、彼らにとってどんな意味を持つのかを、客観的にとり出す工夫である。それは、こうした試行の流れを絶やさず、徐々に広げて大河としていくためにも必要であろう。

本稿はその第一歩としておこなった、ごく初步的な試みの報告である。1995年度人間発達学科プロゼミ（1年生用ゼミ）の一つで、1年生十数名を韓国に連れていった機会に、数種のデータを求めて整理してみた。

和光大学ではこの年に人間関係学部が人文学部より分離独立し、当学科も新人間関係学科と並んで新しく発足した第1年目である。発達学科では、人間の生涯発達という新しい課題に理論的に取り組んで研究を進める一方で、学生ができるだけ学外に出て現実に触れることを、教育方針の一つとしている。町田市、川崎市の近

い地域に始まって、沖縄を含む全国各地へ、さらには外国に出て、さまざまな発達と社会の現実を知り考えさせようとする努力が、すでに始まっている。プロゼミの一つを舞台とした体験学習試行の客観化は、学科の研究・教育の今後とも関わりを持つ、小さな試みの一例なのである。

2. 方 法

体験旅行の内容と研究手続き

プロゼミの経過と事前学習

1995年度は伊藤がプロゼミ担当教員の一人になる年で、表題を「平和を学び調べ表現する」とした。受講登録者は16名(男7女9)。現代世界の重要課題である平和の問題を広く深く考えることをめざし、具体的な2地域を選んで、歴史や文化等を文献で調べた上で、現地に行き体験し考え合う、というやり方をとった。95年10月には沖縄へ、96年3月には韓国に行く計画を、教員と受講学生全員で立て、実施した。本稿は、後者つまり韓国行を対象に試みた研究の報告である。

参加者は、病気入院中の男子学生1名を除く全員と、話を伝え聞いて参加を希望した他学科生など4名の計19名。教員は伊藤・石原と、同学科非常勤教員の計3名、他に通訳として東大大学院に留学中の韓国女性1名。プロゼミでは秋半ばから授業の終わる1月までのほぼ毎回、韓国行に向けて予備学習をした。内容は、初歩の韓国語の学習、日韓の歴史と現状についての多角的な勉強で、行き先からも当プロゼミの主旨からいっても、平和を考える観点からの学習が中心だった。学生互選の7名から成る実行委員会が、教員(伊藤)と共に予備学習と旅行内容検討の中心となり、ゼミ員にはかりながら授業最終回の1月には、この旅の目的と計画を確定した。目的は、「韓国社会と日韓関係の歴史の認識を深める」「韓国の大学生と交流し…友好関係を進める」「グループ行動では学生自らが計画を立てて現代の韓国を探究する」の三つで

ある。計画は、「日本植民地時代を中心に…史跡や諸施設の見学、韓国人被爆者と元従軍慰安婦の話を知る、韓国の大学生との交流」の三つが主要部分で、ほかにグループの自由活動と個人単位のホームステイが、計画4と5として付いていた。

旅の日程・内容

日程は96年3月21日～27日の足かけ7日だが、往復の飛行機がどちらも昼前後の搭乗だったので、実質的な体験活動は5日間である。簡単に日ごとの宿泊地と、主な活動内容を記そう。21、22日はソウル市内、23日はバスで南下して古い時代の都である慶州、24日はさらに南下して釜山に各1泊、25日と26日は再びソウルに戻って前と同じホテルに泊まった。

到着翌日の22日は、安重根記念館、パゴダ公園、国立中央博物館及び昌徳宮を見学した。それぞれについて簡単に記すと、安重根は1909年にハルビン駅で伊藤博文を射殺した「義士」で、同志たちとの綿密な計画の下に実行し、捕えられて裁判を受け刑死するまでの数カ月、侵略者日本の非を論じ愛国の書を残して、日本人の看守をさえ心服させた。記念館には、諸資料や遺墨、遺品が多数展示されていた。

パゴダ公園は1919年3月1日、33名の志士たちが、ひそかに起草した「独立宣言」を読み上げ公表した記念の地で、この日以降民衆の独立運動は朝鮮全土に広がり、激しい弾圧にもめげず各地で1年余りも続いた。その様子を刻した大きなレリーフ十数枚が、公園の一角に並んでいる。韓国の見知らぬ老人が、われわれ一行に流暢な日本語で話しかけてきたばかりか、自製の日本語の資料ビラを配って、この地の意義を語りレリーフを一々説明してくれた。大戦中日本に強制連行されて労働した75歳の人で、日韓の若者に「正しい歴史を知ってほしい、そうして初めて両国は真の友人になれる」と学生たちにくり返し語った。

国立中央博物館は、植民地時代朝鮮総督府だった巨大な建物で、解放(光復という)50年

を機にとりこわしが始まっていた。旅行した3月には博物館としてまだ使われていたので、入館して韓国の歴史・文化の基本的な事柄や美術品を見学し、工芸研究家柳宗悦が草した文と朝鮮民衆の運動によって守られた光化門をも見る事ができた。

翌23日は、ソウル南郊の堤岩里^{チェアムリ}とさらに南の民族独立記念館に行った。堤岩里は素朴な農村で、3.1運動の際日本軍が教会堂に村人を閉じこめ、ガソリンをかけて焼き殺した虐殺の地である。逃げようとする人びとを銃剣で刺し殺して火に投じたそうで、23人が犠牲になった。広々した田畑の中に、記念碑と小さな記念館が建っている。

独立記念館は、広大な敷地に建つ数棟の巨大な館群で、「民族精神を涵養」するために、「全国民の献金で」1987年完成した。植民地化の経過、3.1運動、その後息長く続いた民衆各層の抵抗、を扱う第3、4、5館を重点に、見学の予定だった。あいにく第3館が修理中閉館で残念だったが、無理やり日本姓に変えさせられた戸籍の現物や、虐殺、拷問の実景を写すパノラマ人形など、生々しい展示が数多くあり、韓国人に民族意識をかきたて、日本人には過去の罪を直視させる効果が大な施設である。

独立記念館の見学は、当地の壇国大学の学生と数名ずつのグループで入り、説明してもらった。というのは前日22日の夕、かねて頼んであった日本語科の10人がきてくれて、一緒に焼肉の夕食をしながら大いに語り、歌い、楽しく交歓をしたのだ。すっかりうちとけた彼らは、新しい顔も交えてやはり10人が、翌23日の堤岩里と記念館行にもつきあってくれた。バスに揺られる数時間に、こちらの通訳役の院生が上手に司会をして、自己紹介や質問を出させ、交歓はやがて両国の若者の歌合戦に発展した。プロゼミで予習してあった韓国の歌と一緒に歌い、当地でも人気のある日本アニメの主題歌を同時進行の両語で歌ったりした。バスの席は前夜の交歓会の時と同じく日韓双方の席がまざるようにしてあったから、歌の合間には個人的な話し合いの花も咲いた。まもなく20歳になる

と兵役で2年余りも大学を離れねばならない不安など、日本には聞けない韓国青年の実情が、切々と話された。

記念館で彼らと別れて、古都慶州へ。奈良とよく似たふんいきの地で、古い寺々や仏像を見学した。古代の製陶技術を復元して壺や置物を作っている現場が珍しかったし、日本のと似た古墳群も見て回った。24日は釜山まで行って泊り、タワーから対馬海峡を見て竹島（韓国名独島）領有問題に触れ、魚市場の活気の中を歩きまわった。

ソウルに戻り、明日は帰国という26日は、この体験旅行の主要計画の一つである韓国人被爆者と元従軍慰安婦に話を聞く日だった。前者は徐さんという広島で被爆した80歳の男性で、今も後遺症に苦しみ家族も亡くしたという。日本政府の補償を求めるだけでなく核廃絶の運動もしており、日韓の若者に志を継いでほしい、と熱をこめて話された。同じ日の夕、元従軍慰安婦尹さんの住む町に行き夕食を共にしながら、悲痛な体験談を聞いた。12歳で捕われ、日本兵の言うままにならなかった少女は、乱暴され腕を折られて今も不自由という。つらい過去をこうして語るのも、「私たちのような人が二度と出ないため」と話す老いた頬を、涙が伝った。国としての謝罪と補償を求めて、彼女たちが日本大使館にかけける抗議デモは、毎水曜日欠かさず行われ、二百回に達したという。

研究の方法・手続き

1年生たちはこの体験学習旅行に、何を期待し、どんな印象を持ち、何を得たのだろうか。こうしたことを知りたい場合、事後に感想文を求めるのが、ごく普通のやり方だろう。しかし感想文の書き方は当然十人十色だから、次々読んで全体の傾向をつかむか、目立った数編のしかも部分を任意に引用する程度で、終わりがちである。われわれはほんの一步でも客観的データに近づく方法として、感想文のほかに旅行の直前と直後に簡単なアンケートをすることにした。旅の自然な流れをできるだけ損なわないために、アンケートは最少限の事項に絞った代わ

りに、回答時期の一定とデータ回収を確実にすることにした。

事前アンケートは、出発の前々日である3月19日に、大学の教室に全員を集めて実施した。問は2つで、1は「韓国に行くのは初めてか、何回目か」を問い、問2は、「韓国に行ったら」として以下を3項に分け、(1)どんな所に行ったり見たりしたいか、(2)どんな人と会ったり話したりしたいか、(3)どんなことをしたいか、をそれぞれスペースを設けて自由に記入させるものである。3項とも「できるだけ具体的に」と書きそえ、(1)には「場所、事柄など」、(3)は「例えば何々を買うなど」と例示をそえた。

事後アンケートは、韓国最後の夜つまり26日夜に、ソウルのホテルで実施した。問は2つで、1は「あなたにとって韓国とは何でしょう、か」、問2は、「韓国に行ってきた」として以下を4項に分け、(1)印象深かったことは何か、強い順にいくつでも、(2)行く前と後であなたの中で違ってきたことは?いくつでも、(3)事前に本を読んだり話し合ったりしたことが役に立ったか、(4)近いうちもう一度行きたいか、その理由、をたずねている。これと共に400字詰原稿用紙5枚を渡し、その範囲内で全く自由に感想文を書くことを求めた。できれば同夜就寝前に、無理なら翌朝までに両方を提出してもらった。

事前・事後両アンケートとも氏名欄があるが、「研究以外に使用しないし個人名も出さない」と明記して、「思ったままを述べて下さい」とある。

その夜以前に別行動で一行を離れた者が3名、別の理由で提出不能だった者が1名あり、結局19名中15名の協力が得られた。この15名全員が、事前アンケートの問1に「初めて」と答えており、この前提条件は同一となった。

3. 結 果

資料ごと及び個人タイプの分析

結果の処理と分析は、以下の方針で行なった。まず事前事後アンケートの結果及び感想文の数

量化可能な部分を扱い、この旅が学生に持った意味の全体像を明らかにする。次に学生ごとに3データを通して扱って、旅への態度や生じた効果に個人のタイプがあるかを分析する。対象が15名と少数のため、後者の個別分析はもちろん前者の数量的データも、いわゆる統計的処理はしないことにした。群差・タイプ差等をきわだたせるよりも、学生たちの生きた姿を総合的に明らかにしたいからでもある。

3-1. 前後アンケート、感想文の3データ別考察

旅行への期待と平和関心度による差

事前アンケート問2の回答を見ると、行きたい場所に始まる3項とも、学生たちがこの旅に持った期待は大きく二つに分けられる。予備学習に基づくと思われる平和関連の事柄と、それ以外の生活や趣味関連の事柄とである。そこで、どの項にせよ平和関連の期待を一つでも持つ者と全く持たない者とに分けてみたところ、9名と6名に分かれた。前9名をさらに見ると、平和関連回答が3以上で3項すべてにわたる、つまり特に平和関心の高い者は4名だった。

この9名と6名を仮に平和関心あり群となし群と名づけ、3項各々の期待回答数を合計・平均と共に示すと、表1のようになる。

まず、(1)～(3)項各々右端の合計欄を見ると、平和関連の上2答と生活関連の下3答はほぼ1:2の比で、1人当たり平均は、行きたい所、会いたい人、したいことを合わせて7～8回答である。1年生たちは一応、かなりの期待を持ってこの旅に臨んだといえよう。当然だが個人差は大きく、3項合計16の者からゼロ回答者にわたっていた。

次に平和関連期待を1つでも持つ者と持たない者の2群を比べると、3項とも前者の平均数が、後者のその2倍前後になっている。平和関連の期待を持つ学生は、その他の場所・人・行動にも関心が高い傾向が明らかで、言い換えれば平和関心の薄い者たちは、それに代わるほ

表1. 旅への期待3種と平和関心

(1) 行ったり見たりしたい場所		平和関心		計	(2) 会ったり話したりしたい人		平和関心		計	(3) したいこと		平和関心		計
		あり	なし				あり	なし				あり	なし	
	博物館記念館など	11	0	11		元従軍慰安婦など	2	0	2		記念館等見学	7	0	7
	元従軍慰安婦の家	2	0	2		反日的な人	7	0	7		討論・考える	4	3	7
	大学	3	0	3		大学生・同世代	8	4	12		観光・見物	5	1	6
	市場、街など	9	3	12		普通の人	3	3	6		買物・食事	15	3	18
	民家、寺など	4	5	9		その他	1	2	3		その他	3	3	6
	計	29	8	37		計	21	9	30		計	34	10	44
	平均	3.2	1.3	2.5		平均	2.3	1.5	2.0		平均	3.8	1.7	2.9

ど行きたい・したいなどの対象を豊かに持つわけではないらしい。となるとこの2群の差は、平和に限らずより一般的な、新しい経験への積極性といった違いを表しているのかもしれない。

旅行の印象・予備学習の効用感と平和関心度との関係

事後アンケート問2のうち、平和関心と関係がありそうな(1)印象深かったこと、(3)予備学習の有効感の2項について、表2に示す。

表2. 旅の印象と予備学習の効用感

(1) 印象深かったこと		平和関心		計
		あり	なし	
	博物館・記念館等の見学	8	1	9
	元従軍慰安婦の話など	3	2	5
	韓国大学生との交流	5	5	10
	韓国人一般	2	3	5
	市場、街、食物その他	5	6	11
	計	23	17	40
	平均	2.6	2.8	2.7
(3) 予備学習は役立ったか		平和関心		計
		あり	なし	
	はい	6	1	7
	はい 少し	1	4	5
	いいえ 勉強不足	1	1	2
	いいえ 実見と違った	1	0	1
	計	9	6	15

印象深かった事柄は多岐にわたるが、全体では平和関連(14)とその他(26)とがほぼ1:2の比で、期待での比と対応している。群別に見ると、平和関心群は印象も平和関連から多く得、なし群は平和以外からの印象が多い。しかし表1と違うのは、なし群にも少数ながら平和関連の印象をあげた者があり、また平和以外の印象数多くて、1人当たりの平均数は両群ほぼ等しいことである。あまり期待せずに韓国にきた学生たちにも、やはり初めての異国の印象は多期待者と同程度に強かったらしい。

旅行前の予備学習が役立ったとふり返る者は、12名つまり4/5に達した。しかもノーと答えた者も、「もっと勉強すればよかった」自省と、「紙上の勉強は実見の力にかなわない」意味の否定である。どちらも単純な肯定以上の積極性を持つと見得るから、このプロゼミで多角的かつ多分に主体的に行なった事前の学習は、メンバー全員に「効果あり」と実感された、といっている。

そうした中でも、旅前に平和関連の関心を持った者とそうでない者との、微妙な違いが見られる。前者では6名2/3がはっきりと肯定し、後者の4名同じく2/3が「少し」と控えめな注をつけたのである。事前の学習はプロゼミテーマからも当然平和問題が中心だったから、その面に関心深く期待も印象も強かった者と、そうでない者とは学習の効用感に多少の差のあることは、自然だ。数字はこの差を正直に表しており、言いかえると学生たちの回答が素直で、

「思ったままを述べ」たらしいことを示している。

旅行による変化の自覚と韓国への親和感の個人差
事後アンケート問2の残る2項は、旅で自分に生じた変化と、韓国再訪の意思を聞いている。結果を一括して表3に示す。

表3. 旅による変化と再訪意思

(2) 自分に生じた変化	平和関心		計
	あり	なし	
反日感情が意外に強くない	3	3	6
問題意識の深まり	3	2	5
街・食物等	3	0	3
分らない、なし	2	2	4
計	11	7	18
平均	1.2	1.2	1.2
(4) 近いうちに行きたいか	平和関心		計
	あり	なし	
はい	4	3	7
いいえ 勉強し、考えてから	3	1	4
食や人が合わぬ	2	2	4
計	9	6	15

生じた変化の回答平均はすべて1.2で、問に「いくつでも」とある割に少ない。最終日とはいえまだ旅先では、自分の変化をしっかりと確かめる段階にないことの、これも正直な表れだろう。そんな中でも、事前の学習に基づいて「韓国人は日本人を恨んでいるだろう、冷たくされて当然」といわば覚悟してきたのに、意外にやさしく接してもらえた、という意味のことを書いた学生が最も多く、問題意識の深まりがそれに次ぐ。街や食物に関しても、意外に清潔とかおいしいなど、事前情報に基づく予期の修正が主である。これまでの結果と違って、平和関心による差はほとんどない。

再訪意思は、ありとなしが各7と8名で半々となった。前者の理由は、韓国の現況や歴史・文化をもっと知りたい答と、友人特に交流相手の学生と会いたい答がほぼ半々。「ノー」8名中半数は、もっと勉強し考えを深めてから行きた

いと書きそえた者で、従って否定というより設問の「近いうち」をまともに受けとめた、まじめな延期希望とっていい。残る4名は、食物が合わない、人が嫌い、別の国に行きたいなど、理由をあげての明白な再訪否定である。平和関心群に延期しての訪問希望がやや多いほかは、やはり群差はない。

事後アンケートの残る1項は、問1「あなたにとって韓国とは」をいきなり聞く、いわば総合的な韓国観を問うものである。答を分類すると、表4上半のようになる。

表4. 全体的な韓国イメージ及び再訪意思との関わり

1 あなたにとって韓国とは			平和関心		計
			あり	なし	
	近い国、近くなった		3	1	4
	やさしい、仲良く、友国		2	2	4
	初めての外国、など		1	2	3
	分らない、その他		3	1	4
計		9	6	15	

問1 問2(4) のクロス	韓国観		親和	中立	計
	したい		6	1	7
	したくない	延期し、勉強	1	3	4
		否定	1	3	4
	計		8	7	15

韓国の全体的イメージを問われて、「近くなった」「協力を深めたい」など親和感を記した者は約半数の8名、「国の一つ」など中立的な事実答と「分らない」等の保留答が、合わせて7名。表3下半の再訪意思と分かれ方が似ているので、両答をクロスしてみたのが表4下である。両答の関連は明白で、韓国を近い友国と思えば再訪意欲も増すが、中立や保留だとさしあたって行きたくない答になるのであろう。

自由感想文で多かった言及項目—学生や受難の人びととの交流

2000字をメドに自由に書いた感想文は、当然各文さまざまで数量化できるものではない。

次節 3-2 で扱うような質的分析が適切だが、その前に一応、学生たちの関心の向かい方を数で見ておこう。

提出された感想文を見ると、記述の仕方はおおよそ 2 種あるようだ。事柄のあった順に日記風に書いていくものと、思い浮かぶままに記していった規定字数に達したらやめる式とである。後者が大多数だったので、心に残った強さが書く順位に、考えた深さが記述の長さに表れる、といっている。従ってある事柄に何人が言及したかによって、彼らに与えたインパクトの度を推測することができる。ただし全 15 人中 3 人は、こうしたあれこれ記述式でなく、多分意識的にただ一つの事柄に集中して書いていた（堤岩里事件、徐さん尹さんの話など）。そこで言及数は、彼らを除く 12 人（平和関心 7、なし 5）について見ることにした。

最も言及の多かった事柄は韓国大学生との交流で、11 人が書いた。次は元従軍慰安婦尹さんの話で、9 人つまり $3/4$ が言及した。三番目は、韓国大学生が歴史に詳しく日本語・英語に達者なのに感嘆し、自分たちの学んできたことの狭さ浅さを反省した感想で、8 名 $2/3$ が書いた。4 番目が被爆者徐さんの話で、ここまですべてが人間同士が接し語った体験である。対人的な経験は、彼らに迫り考えさせる力を持つといえよう。これに比べると平和関連の諸施設は、事後アンケート問 2 の印象欄に名が出た割には言及が少なく、1カ所でも書いた者は半数の 6 名だけだった。複数箇所だし日記風の記述なら必ず出るわけで、それに比べて対人的感想の多さ強さが、いっそう明白となった。

これらの言及数はどれも平和関心群に多い傾向があるが、人数自体が少ないためはっきりした数字ではない。その中で明らかに群差のある事柄が、一つあった。「韓国人は日本を恨んで冷たくすると覚悟してきたのに、意外にやさしく接してもらえた」という感想で、表 3 上の最多答を詳しく文章にしたものである。これを書いた 6 人のうち 5 人が平和関心群で、関心なし群 5 名中この感想を書いたのは 1 人だけだった。関心群の学生たちは事前学習に精を出し、日韓

史を深く知るにつれおのずから負い目の意識や、韓国人の恨みを恐れる気持ちを強く持つに至ったのだろう。表 1 (2) の答で、「反日的な人」と会う予想がこの群に目立って多いのも、このことを傍証している。予期に反した人びとのやさしさに触れてほっとした解放感が、新しい親和感を生み、予備学習はやっぱりやってよかった、と答える一因ともなったと思われる。

3-2. 学生個人ごと旅行との関わり例とタイプ分け

3-1 では旅行前後 2 種のアンケートと自由な感想文の 3 者をデータとして、数量的な扱いを中心に全体の傾向を見てきた。しかし当然だが学生個人は、この 3 要請に通して応じているのであって、しかも素直正直に記したらしいことは随所に見てとれた。つまり各自が個性や経歴を生かして韓国のあれこれを体験し、印象を答えたり感想文を組み立てたりしたのだ。次に必要なのは、3-1 でバラバラにした答を個人に戻して、この体験旅行が各人にどんな意味を持ったかを総合的に見ることで、そしてできればこうした受けとめ方にタイプがあるかどうかを、見分けることである。

答が多様で自由記述部分も多い 3 種のデータから読みとるのだから、研究者の主観が入ることは避けられない。しかし 3-1 でかなり詳細な分析を重ねたから、いきなり個人の記述に漠然と対するのとは違うおのずからな基準、複合的立体的な視座を得たと思うし、分類基準の設定と結果分析は当人たちとふだんの交渉が少ない石原が担当したので、主観混入の度は最小と思われる。以下は、これらを前提としての例示とタイプ分けの試みである。

期待・成果ともに豊かな個人と、自分の生き方にこだわり続けた者

事前アンケートで旅への期待が最多の 16 だった S さんは、博物館等の見学や韓国の人びとの交流に期待し、カップラーメンやお菓子な

どおみやげもうんと買おうと、望み豊かに韓国に來た。それらすべてに満たされたく、彼女にとってこの国は、「これから手を取って協力していくべき国」であり、自分に生じた変化として、「実在のものを見ることができて、そこから肌を通して感ずるということのすごさを知った」と、認識の変革ともいえる自覚を書いている。予備学習は役に立ったし再訪したいが、理由は「交流した大学生に会う。独立記念館の日帝侵略館を見る（前述の通り修理休館だった）」と具体的積極的である。感想文は「堤岩里で見た過去と未来」と題して、この虐殺の地に集中、最近まで事件を知らなかった無知を恥じ、本で読んで旅に臨んだものの、「その印象の強さとショックの大きさは計りしれないものだった」と書く。この思いは、「なぜ日本は朝鮮を侵略し支配しなければならなかったのか」の問に深まり、焼かれた教会の再建が「日本のキリスト教徒がざんげの意味で基金を集めて」だったのにも鋭く疑問を呈して、「やはり勝手と思われても仕方がない」、「経済的な援助より…公式の場での謝罪」が先行しなくては、と書く。堤岩里に視点を据えて、韓国とアジア全体に対する日本人のあり方に、広がり深まる感想となっているのである。

他方の極ともいえるY君は、事前のアンケート3項全部に「まかせます」と書き列ねた、期待ゼロの本人だ。旅行後の印象には「やさしさ→…矛盾」と5つの抽象語を並べ、変化の自覚は「交流に関して」の一語、再訪は「はい、友達ができたから」、韓国イメージは「やさしい国」と、すべて答は最少限である。感想文は他の14人と違ってただ一人、韓国と関係ない「プロゼミと僕」と題した。明るくふるまうが友人たちとしっくりいかない「自分を責め…韓国では今よりもっと新しい自分を知りたい」が本音の期待だったらしい。韓国に「なぜ軍隊がいるのか」などとも記すが、たちまち旅に持参すべきだった楽譜楽器をめぐって生じた友人とのトラブルの話になり、日韓どころか「日本人同士だって仲々分かり合う事や意思の疎通は難しい」と自己省察に落ちこんでしまう。

こうした自己中心的ともいえる内省的な旅との関わり方は、彼だけではなかった。音楽マニアらしいH君は、「同世代で音楽の趣味の合う人」に会うことだけを期待した。感想文は日記式だが、この地の店で日韓英3語に身振りまで使って望むCDが買えた喜び、バスでの歌合戦、夜ホテルで「カラオケで汗だく、大いに盛り上がる」など、音楽の記事満載だ。おまけに清潔マニアでもあるらしく、毎日「風呂に入る」今日は「入らなかった」と記し、シャツや靴下の匂いをのべつ気にしている。しかし彼は音楽交流に満足したのか、感想文の最後に「韓国大好き」「近くて近い国になった」と大書し、再訪希望を聞く問には、「はい。韓国人が大好きだし、この旅行で得たものがあまりにも大きかったから」と記している。

あれこれバランス収獲の者と、楽しみ期待から現地で問題意識にめざめる者

Iさんは、旅への期待を問われて平和関連とその他とを同数書き、旅行後の変化も人びとについてと街や食物の印象好転とをバランスよく書いた。感想文は学生交流、徐さん尹さんなどをあれこれあげてきちんと考えたことを書き、「このまま帰れば終わり」にならないよう、「絶対忘れてはならない」とまとめた。韓国イメージは「わかんない」、再訪は「はい。もっとゆっくり見てみたい。一回じゃ見きれないから」と慎重だ。初めての体験旅行にまじめにとり組んだ学生の、最大公約数的な反応で、その意味で典型例といえるかもしれない。

その一方でKさんは、事前アンケートで買物、食事、見物など楽しい期待を誰よりも多く10個も書いた。ところが現地で元従軍慰安婦との会見は、「貴重な体験」として「深く印象に残り」、感想文の $\frac{2}{3}$ ほどがこれで埋めつくされている。「教科書にのっていない本当のことを教えてくれた…お礼を何かの形でしたいです。…尹さんたちの役に立ちたい」と真剣に書く。学生交流の楽しさに話を移した後でもう一度戻って、「日本政府には人の痛みをわかる国家であってほしいし、これからは私たちがそういう国家にな

るよう、頑張って働きかけていかなければならないと思います」と結んでいる。

勉強不足を自省する学生と、期待も得たものも少ない消極派

O君は感想文の題を、「勉強不足」とした。平和関連とその他の期待を程よく持って旅に出たが、事ごとにこの痛感が深まったらしい。「同じ大学生にガイドをしてもらったのに、説明の内容が理解できない…事前学習をもう少しきちんとやってくれば」よかった、と悔やむ。こうした個人的反省はやがて、「日本では安重根を“暗殺者”として扱うが、韓国では…“義士”」の違いに驚き、竹島問題でも、「日本人は最近になってやっと竹島の存在を知った人がほとんどであり、国民意識の違いを感じた」と広がり深まっていく。そして再訪には、「はい。今度はきちんと勉強してから行きたいから」と決意を表明するのである。

他方Mさんは、旅前の期待が「自然を見る」「風景を眺める」と静止的で、前述のY君に次ぐ少なさだ。旅後の印象は「キムチ、ハンゲル文字、戦争」、自分の変化は「なし」、韓国のイメージは「初めての外国」と醒めていて、再訪は「いいえ。食が合わなかった」。感想文は「韓国」と題してあれこれ書いているが、規定の枚数に達しなかった少数者の一人である。

以上の6タイプは典型的

以上目立った6例を記したが、ほぼこのまま学生たちのこの旅との関わり方6タイプといってよさそう。というのは、6種のどれにも例示以外の該当者がいて、特殊な個人とはいえないからである。Sさんに代表される積極型はほかに2人、こだわり型はY君H君の2人いる。Iさん式のバランス型は3人、楽しみ期待からのめざめ組も2人。勉強不足痛感組はO君以外にもう1人いるし、消極型は再訪拒否ぞろいの3人いる。公平誠実に分類してみても、あまり見事に分かれるので研究者自身驚いている。

プロゼミでの予備学習にそろって参加し、同一日程の旅で大筋同じ見聞をしながら、学生た

ちの関わり方はこのように多様で、個性的である。注意すべきことは、どのタイプが体験学習旅行の目標からいって望ましく、ある型は意図から落ちこぼれた連中と、軽々しく判定すべきではないことだ。次章でまとめて述べるが、望ましいタイプの学生数や比でこの体験旅行の成否を評価するなどは、ましてすべきではない。音楽ファンはそれを通じて韓国大好きになったし、平和学習のやり方によっては韓国人への警戒感を増すこともある。第一、韓国に行ったからといって好きになるかどうかは、旅行の計画や参加者の個性などさまざまな要因が働くものであろう。

4. ま と め

この体験旅行研究で分かったこと

学生皆が旅行の意図に沿うわけではなく、個々人のうけとめ方は多様である

現代世界にとっての平和の大切さを体験を通して学ぶ、というこのプロゼミの意図は明確で、事前の予備学習にもかなり力を入れていた。これが受講学生に届いたらしいことは、病氣入院の1人を除くほぼ全員が韓国行に参加したことからも判る。しかしそれでも、学生全員が教員の意図した方向で活動し成果を得たとは必ずしもいえないことが、3種のデータ各々からも個人別の分析からも、明らかになった。平和関連の場所や人などを、どれか一つでも期待した者は $\frac{2}{3}$ にとどまり、期待数、印象数共に生活や趣味のそれらに及ばなかった。事後の韓国イメージに親和を記し再訪意思を答えた者は、共に約半数。個人別総合でも、終始消極的だったり自分の趣味・感情にこだわり続けた者が、合わせて約 $\frac{1}{3}$ いた。

筆者はこれらの事実を、否定的な意味で並べているのではない。初めに述べた通り、体験学習試行は和光だけでなくあちこちの大学で増えてきたが、客観的測定的面は充分とはいえないから、こうした学生の実態を捉え得たのは、貴重重要なデータである。ともすれば旅行の企画

者である教員は、学生たちのエピソード的な言動と自分の思いこみに基づいて、参加者皆に自分の意図が充分実現したものと、みなしがちではないだろうか。若い彼らには、教員の考える以上に多種多様な関心や試したいことがあり、自己像の揺れもあって、旅の様相は多彩なのだ。これは実は平生の教室の授業でも同様で、われわれの別の研究では、教員の授業意図が受講学生にうけとめられる率は、7授業例一致して50～60%だった。⁽⁶⁾この数字は、上の諸結果の大よその傾向と似ている。

意図うけとめ率で試行の成否を速断すべきでないが、事前学習は有効なようである

従って前章の終わりにも述べた通り、教員の意図に沿う答の率や望ましい成果を感想文に記した学生数が、体験学習試行の成否を測るモノサシではない。彼らが新しい体験を消化吸収して自分の血肉とするには、時間を要することがあり得る。アンケートや感想文は、これをある時点で切りとった仮の像だということを、忘れてはならないだろう。例えば楽しみの期待一杯で来て問題意識にめざめた学生は、自分の感性に合うきっかけを得た好運者といえよう。得るもの少なかった消極派も、本人が望む通り別の国へ行けば、そこでめざめる何かに出会えるかもしれない。めざめの機会を増やす工夫はすべきだが、学生の成長は長期的力動的に見る必要がある。実は旅の数カ月後に第3のアンケートで追跡調査をする計画があったが、諸事情でまだ実現していない。また事前事後アンケートには別に、PAC分析による韓国イメージ変化の測定を伴っていたのだが、その結果報告は別の機会にということになっている。

それにしても教室での事前学習は、こうした多様なとりくみ方をする学生たちのほぼ全員に、効果ありとうけとめられた。体験学習試行の際に、新鮮さを優先して予備知識や討議なしで行く場合と、このプロゼミでのようになんやら仕方とがあるが、少なくともこの結果は、後者にくみしたといえる。実験的に両者を比較したわけではないから確実とはいえないが、前者の

やり方が面倒を避ける口実となりかねないことを思えば、これも参考にできるデータである。しかも先に述べた通り、現地にきてみてこれまで学んだことの狭さ不十分さを自覚したり、机上の勉強の限界を実感したりするきっかけともなり得る。その一方で事前学習が、必要以上の不安や逆の偏見を生ずる場合もあることを、データは示してくれた。

学生が旅から受けとる最大の効果は、対人的体験から生ずる

これはかなり確かな結果だ。自由に書く感想文で多くの学生が言及した事柄は、学生交流を筆頭に徐さん尹さんなど、すべて生身の人間と出会って話した体験ばかりだった。記述の量も多く、内容も豊かである。博物館・記念館など平和関連の見学は、事前学習の主内容と重なっていたにしておいては、言及した者は半数にとどまった。言及した場合も、Sさんの堤岩里の文例に見る通り、日本が迫害した人びとの苦しみとそれへの贖罪が、主な関心である。

ある体験が後まで跡を残し考えるきっかけとなる際の基本の所には、やはり人と人のコミュニケーションが在るのだということを、この事実は示しているといえよう。彼らの年齢や状況がそうしたことを求めるのだろうし、人間発達学科生だからもともとその傾向が強い、といえるかもしれない。しかしそうした条件を超えてやはり、人と人のきずなが体験の効果を支える、とおおよそその仮説を立ててもいいように思われる。体験学習旅行の計画を立てる際に、このことに留意し重視した方が良く、データは教えている。中国文学紀行やローマ美術探索のインパクトも、要は人の営みに触れることが大きいのではないか。

中でも韓国大学生との交流は、学生の多くが事前から期待し、印象を受け、ほとんど全員が感想文に書いた。同世代だから70～80歳の人びとより親近感を持つのは当たり前だし、夕食やバスでかなり長時間の楽しい交歓が、いっそうそれを強めたにちがいない。しかし学生の何人かが、具体的な氏名をあげて生き生きと親

交の体験を記し、再訪希望の理由にも多く言及している事実は、重要である。植民地支配の歴史や現在の政治状況等の中で、日韓の青年たちは故意にといっているほど隔てられている。こうした機会に生身の人間同士のコミュニケーションが成立し、理解と好感が深まることは、少しずつでも人びとが結ばれていき、やがて両民族に真の友好関係が成り立つ礎となるだろう。徐さんとパゴダ公園の老人も、同じように両国の青年に未来を託す希望を口にしていて、そしてこのことはまさに、プロゼミのテーマである平和を招来する道であろう。

歴史の中の人間を知り、自分を位置づけ直す体験

対人的体験が跡を残し考える手がかりになる、という場合、相手は誰でもいいわけではない。韓国の大学生は明るく歌のうまい反面、兵役の不安に悩む現実の中の若者だ。徐さん尹さんはそれぞれつらい過去をのりこえて、残り少ない生を未来に賭けようとする人たちだし、偶然パゴダで会った老人もそうだった。歴史の中で翻弄されながらもけんめいに生きようとする人びとの実像が、表向き「平和」で豊かな日本では接することのできない力で、学生たちに訴えたのではないだろうか。事前の学習と体験相手の選択とは、やはり重要であり成果を左右する、といえよう。

社会の諸層から大学にきてやがてそこへ巣立つ学生たちは、激動する現代世界のなかで、自分の未来をどこに賭けていいか迷い、模索している。エリートとして社会の上層位置が約束されていたといえる昔の学生とは、違うのだ。だから大学で人類の文化的遺産である諸学、抽象的な知の体系を学ぶと共に、外に出て歴史に生きるさまざまな人とコミュニケーションする体験は、前者に劣らず重要と思われる。このプロゼミが属する人間発達学科にひきつけていえば、人間の発達とは理論枠の中で研究されると同時に、より広く深い歴史のなかで刻々変化する。自分のそれを見定める作業は同時に、世界各地の人びとへと関心を広げる。韓国に限らず、生き通すことさえむずかしい国の子どもたちの未来を考

えることにも、つながるだろう。⁽⁷⁾⁽⁸⁾

体験学習旅行の意義は学生たちにとって、究極的にはそのあたりにある。そして実は教員にとっても同じだ、といえるのではないだろうか。

文 献

- (1)梅根 悟「教育の話」ほるぷ出版、1984年
- (2)梅根 悟「小さな実験大学」講談社、1975年
- (3)和光大学授業研グループ「大学における授業研究その3」和光大学、1992年
- (4)「和光大学中国研修旅行記録第1回～第8回」和光大学、1987～1995年
- (5)立教大学全学共通カリキュラム運営センター「大学教育研究フォーラム1」立教大学、1996年
- (6)和光大学授業研究会「語りあい見せあい大学授業—小さな大学の大きな挑戦」大月書店、1996年
- (7)松井やより「市民と援助—いま何ができるか」岩波書店、1990年
- (8)A. アルスブルック、A. スイフト、甲斐田万智子訳「未来を奪われた子供たち」明石書店、1990年